

明治31年、佐賀中学校春季修学旅行の実相

野 口 周 一

The Reality of School Trip in the spring of 1898 of the Saga Junior High School under the Old System of Education

NOGUCHI Shuichi

要 旨

昨今のコロナ禍の最中においても、修学旅行にはそれなりの意義があるということで、形を変えても実施しようという努力が払われている。修学旅行については『学習指導要領』に規定されているとはいえ、この機会にその淵源を訊ねることも意味あることと思われる。

本稿では、明治31年に実施された旧制佐賀中学校の春季修学旅行を掘り起こし、その意義を問いたいと考える。

Abstract

A school trip may be of some significance even in the midst of the coronavirus pandemic. On the basis of this thinking, teachers and school officials are paying considerable efforts to carry out a school trip even in a different form. The government guidelines for education define a school trip and the author thinks it is meaningful to explore the beginning of the trip on this occasion.

This paper questions the need for a school trip through examination of unearthed records about a school trip in the spring of 1898 of the Saga Junior High-school under the old system of education.

1、はじめに

昨今の新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、修学旅行や運動会などの学校行事が中止や縮小を余儀なくされている。例えば、「毎日新聞の取材では県内の大半の小中学校が修学旅行の代わりに日帰りの校外学習を実施する方向だ」と伝えている（『毎日新聞』群馬版、2020年10月18日付）。全国的にも、「朝日新聞」は「修学旅行 公立校15%が中止」の見出しのもと「公立小中高の15%」が中止を決めるなか「一方で、およそ66%の学校が実施を決定」と報じた（20年11月8日付）。

コロナ禍のもとで、かように修学旅行実施の意義を見出している学校も存在しているのである。従って、この機会に修学旅行の意義を再検討する必要性もあるわけである。

本稿では、まず「学習指導要領」を紐解き修学旅行の学校教育における意味を確認したい。次いで、筆者の研究テーマである下村湖人には、その著『次郎物語』第3部に修学旅行論の原型となるテーマと考えられる、すなわち筑後川上流探検行がある。そこで、湖人が佐賀中学校在学中（1898年<明治31>～1903年<明治36>）の修学旅行の状況を、同中学校の校友会誌『栄城』より採録し、その実相に説き及ぶことを本稿の目的とし、然る後に『次郎物語』第3部のモチーフに説き及び、さらに現代における修学旅行の意義に論及することを企図している。ここでは、まず春季修学旅行の実情を当時の資料をもとに取り上げたい。

2、『学習指導要領』における修学旅行の位置付け

本節のテーマについては、齋藤忠和氏が「社会科（地理歴史科・公民科）と修学旅行—私立高等学校での事例と歴史教育の視点からの考察—」（『総合歴史教育』第53号、総合歴史教育研究会、2019年）を執筆され、そこで言及されている。最新の概説である。

まず氏は「はじめに」において「修学旅行は『学習指導要領』（文部科学省2018年）に定める特別活動の学校行事の一つ、旅行・集団宿泊的の行事であり、現在もほとんどの高校で実施されている」と説き起こす。そのすぐ後に、氏は「ただしその名称は、各校それぞれであり、前任校・現任校ともに、学びのイメージを重視するためか、研修旅行と呼んでいる」と注意を喚起している。

齋藤氏は、次に「1、研修旅行の目的と意義」という章を立て、「（1）どのような目的で実施すべきか」という節において、『学習指導要領』『特別活動第5章第2の②「内容」（4）旅行・集団的宿泊行事」を引用、「つまり、修学旅行は、普段の生活とは異なる場所で、①見聞を広め、②自然や文化などに親しみ、③集団生活のあり方を学び、④公衆道徳について学ぶものとなる」と要領よく纏められている。さらに『学習指導要領解説 特別活動編』（文科省2018年）の「校外の豊かな自然や文化に触れる体験を通して学習活動を充実発展させる。（91頁）」を引用、「学

校での学びをさらに発展させることをその狙いの一つとしている」と述べる。また『解説』の「実施上の留意点」(イ)の「指導計画の作成とその実施に当たっては、行事の目的やねらいを明確にした上で、その内容に応じて各教科・科目、総合的な探求の時間、ホームルーム活動などとの関連を工夫すること。また、事前の学習や、事後のまとめや発表などを工夫し、体験したことがより深まるような活動をする」と引用、「教材との連携による学習と事前・事後学習を行うよう記している」と一定の理解を示しているものの、氏は上記の①と②に関して「現地での教科の学びと関連した『学知』が必要であると考え」ていることを強調する。つまり、齋藤氏にとって「学知」はキーワードなのである。

翻って、齋藤氏は「そもそも、日本における修学旅行の嚆矢は」と説き起こされ、各種の資料、論考を収集、各種学校の事例を分析され「明治19(1886)年2月15日から26日にかけて実施された東京師範学校の『長途遠足』である。これは『兵式操練』と実地の『学術研究』を兼ね備えたものであった」と結論付けられた。また氏は東京高等商業学校の事例を紹介され、「高商の就学旅行は文字通り学を修めるための視察旅行であり、選抜された成績優秀な学生数名が、学校から旅費を支給されて地方の商工業視察に赴き、帰着後に視察内容をまとめた報告書を提出させ、その教育効果は大きかった」という論者の結論にも及んでいる。さらに第一高等学校では「行軍が目的」、第三高等学校では「学術研究と行軍」、第五高等学校では「行軍・発火演習」であること、師範学校では「学術研究と心身鍛錬」であること、等々をも紹介された。要は「学術研究と行軍が混交した中途半端な修学旅行」であり、それが「広く各学校に定着していったこと」を説かれたのである。

齋藤氏はさらに精緻な分析を続け、その論述は戦後にまで及ぶが、筆者は論旨との関連上、遺憾ながらここでは割愛させていただく。また齋藤氏の論考は原著をご一読いただければ研究者としての倫理を遵守されつつ執筆されていることは一目瞭然であることを、筆者は付記しておきたい。

3、佐賀中学校春季修学旅行の実相

佐賀中学校の校友会誌『栄城』第4号(明治31年5月10日発行)には、「栄城第四号附録」として「明治卅一年春季修学旅行日記」が「筆記係」によって執筆され、掲載されている。以下、前節の齋藤氏の纏めを念頭におきつつ読み込んでいくことにする。

その書き出しは「五月四日 朝」として、次のように始まる(以下、旧字体は新字体に改めた)。

六時、嚙唳たる集合喇叭の声、朦朧たる朝霧を破って、昊天に響き渡れば、直ちに集まる栄城の健児、其数正に四百九十人、之を十二の小隊と、一つの別動隊とに別つ、別動隊は、筆記係四名、写真係六名、探集係八名抛り成る、八木教諭之を率ふ、之に職員十六名、喇叭手三名、校僕三名を合して、総計五百十二人なり、諸般の準備全く整ひて、六時半出発す、巳

にして市街をはなれば、濃霧は広く平野を閉して日光を遮り、遥なる北山姿見るべからず、只多布施堤上の松樹、依稀としてかすかに認むるを得るのみ。

上述のように記録され、修学旅行に臨む人数、その小隊の数、本隊とは分けて別動隊が組織され、そこに筆記係、写真係、採集係が置かれ、それを率いる教員の名が記されている。

そのあとに旅程が記され、佐賀平野中央部の高木瀬村、現在の和町にあたる川上村より川上川（嘉瀬川）の右岸を進み、三反田さんたんだを経て小副川おそえがわにて昼食を十一時半に摂るとある。

その後、道は川を離れて山に入り「炎熱焼くが如く、流汗玉をなし、暑さ堪ふべからず、路の小流を掬して、僅に元気を保」ちつつ、関屋村を経て神埼郡の最北端に位置する三瀬村¹⁾に着く。この三瀬村は「深山の寒村にして、旅舎とてもあらざれば、已むを得ず人家を徴発して、多きも二三十人、少なきは五六人宛、分れて宿泊したり、かゝる僻落にて、猶よく宿泊するを得たるは、全く村吏の周旋よろしきによれるにて、十町も距りたる役場より、殊に出張所を設け、これがために奔走せられたるは、我等の大に感謝する処なり」とある。これによれば中学生の旅行がまず優先され、それを官民挙げて援助する構図が窺われる。然も「此夜、村吏菅原氏より、生徒一同に菓子を贈らる」とあり、当時の中学生がいかに優遇されていたかがわかる。²⁾最後に「此日行程八里」とある。

翌5月5日は5時起床、6時出発とあり、「時に東天紅をはらんで、暁星漸く消え、四方の山々、徐に紫色を顔はし、風致愛すべし、漸く進みて三瀬峠にかゝる。道路嶮なるにあらざれども、百折盤紆せり、登る事一里、遂に頂上に達す、此処肥前筑前南国の界標あり」と記す。ここからの眺望は「東西は所謂、肥前山脈、連綿として起伏し、南は遠く、天山多良岳を、白雲の中に望み、北は金武峠を越えて、遥かに筑前の平野と、渺漫たる玄界の灘を見る」とあり、今後の針路が示されている。その後「内野に入る此処に小学校生出迎へたり」とあり、「入部、重富、西脇、原、鳥飼等の諸村を経て福岡市に入る。時十二時頃なりき。直ちに西公園に至る」とある。内野、いるべ入部、ママ重富（重留）、西脇、原、鳥飼は現在の早良区にあたると考えてよい。ここで福岡藩主黒田氏の居城である舞鶴城の説明とここからの福岡博多の眺望が記され、2時にはここを出発し、旧城内にある「兵營の縦覧をな」し、「征清鎮魂碑」を見学し、碑の説明が付されている。その後、旅舎に着くにあたり、博多の歴史に言及がある。この日の行程は七里餘とある。

5月6日、「五時、目覚むれば、東天已に紅をはきて、鶏の声ものどけく、今日も亦好天気と知られぬ」と始まり、「六時五十分出発し、二十五町にして、箱崎八幡宮に達す」とあり、「敵国降伏」の額の説明がなされ、「箱松と云へる神木」についてその縁故が詳細に記される。その後「転じて海岸に出づ、石の華表高く立てり、前を眺むれば、海の中道は遠く、渺々たる海中に突出し、残島は左方に当りて高く、見え、海波静にして、碧白相争ふの壯観あらざれ共、漁舟点々として、艫声柔に、網下す様も面白し、海岸は一帶の白砂にして、翠々たる千代の松原は之と相映じ、長さ里余に亘れり、是所謂、多々良浜にして元寇³⁾の変より、尊氏菊池の大戦など鹿を争ふの地

となりし事数回、我史上有名なる古戦場なり、其当時或は血にまみれし兵士、或は矢に斃れし軍馬、如何ばかりか惨憺たりけむ、今思ひ来れば、何んとなく恐しく、身も戦慄する心地す、嗚呼青々たる千代の松よ、若し其当時の状態を知るあらば語れ、問へども答へず、只梢を拂う風の音啾々たるのみ」と記す。続けて「九時、此処を辞して、東公園の東端をめぐりて、堅糟村、那珂村、雑飼隈等を経て、水城に至る」として、水城の説明がなされる。堅糟村、那珂村は現在の博多区に、雑飼隈は大野城市に、水城村は太宰府市にあたる。

そして「都府楼之趾、観世音寺を、左に見て、一時頃太宰府に着き、直ちに天満宮に詣る」とあり、「九州第一の社」と菅原道真についての説明が加わる。「三時、此地を発して武蔵に向ふ、二日市を経て四時達」し旅舎に入る。「此日行程六里餘」とある。この武蔵村、二日市村は現在の筑紫市野にあたる。

5月7日、8時に出発し10時半に原田に着き、ここを出るとすぐに「福岡佐賀両県の界標」にぶつかり、11時半頃田代にて昼食を摂る。原田村は現在の築紫野市、田代村は鳥栖市にあたる。⁴⁾鳥栖停車場より2時13分の汽車に乗り、中原、神埼を経て3時25分に佐賀に着く。「此れより隊伍を整へて、喇叭の声勇ましく、三時四十五分帰校す」るや、垣内校長の「演告」が行われた。その大意が次のように記録されている。

去る四日、出発以来、日々晴天打続き、実に幸福なりき、此旅行に於て、諸君が得られし利益は、実に莫大なるものにして、間接の利益は言ふを要せず、直接の利は、山河を跋涉して、大に体格を強壯にせし一事なり、其険なるや、実に言語に絶せしものありしにもかゝらず、一人の病者なく、能く旅行を終りたるは、実に諸君一同校命を守りたるの然らしむ処にして、余の大に喜ぶ所なり、又斯る好結果を得たるに就ては、余は信ず、上級生の力多きに居れりと、抑此度の五年級は、かゝる多数の生徒を率ゐて、他管内に旅行したるは、今回を以て始めとす、然るに一の不都合なし、凡そ多数の人を率ゐて、事なからしめむとするは、極めて難事なり、唯己れの地位を守り、己れの責任を尽すに在り、苟しくも社会に立ちて、事をなさむと欲する者は、此覚悟なかるべからず、然るに諸君は、之を習得せらる、其利決して僅少にあらざるべし、以後と雖、上級生は此覚悟を以て、責任を重じ、以て益我校の隆盛を期せられむ事を望む、云々

以上である。この垣内校長について、『下村湖人全集』全18巻（池田書店、1955～56年）の「解説」の筆を執った高田保馬は、『次郎物語』第2部において「校長大垣洋輔（本名垣内正輔、明治30年代に佐賀中学校長）」と紹介する。

さて、校長の「演告」について、その冒頭で「体格を強壯」にすると述べていることは常識的である。問題は五年生がリーダーとなって下級生を率いたということである。それは何を意図したものでしょうか。

高田は、その「解説」の前段に「次郎が入学して程ない一年生の頃、圧迫を加えようとした五年の一生徒に反抗して、小刀を握っているときに、朝倉先生がはじめてあらわれる。まず大慈悲を説いて、剣は活人の剣たるべしと教える。それとともに、校長大垣洋輔の葉隠観をきかせる」と記す（『定本 次郎物語』池田書店、1958年）。

ところで、この朝倉先生は湖人が理想とする教師像なのであるが、彼が登場する場面は次郎が中学に入学し、その最初の日に五年生の理不尽な言動にナイフをもって抵抗する箇所なのである（拙稿「下村湖人と吉田嗣義」『人物研究』第39号、近代人物研究会、2017年）。

『下村湖人伝』（柏樹社、1970年）の著者・永杉喜輔は、佐賀中学について「バンカラな校風で、上級生がひどくいばり学校の全権を上級生がにぎったかたちで、日常の学校生活も、教師が監督するというより、むしろ上級生が、校規を維持するという名目で、下級生をよび集めては訓示をたれたりした。『わが校の名誉のために』『秩序を守れ』『規律正しく』などと、おもて向きはもってもらしいことをいうのだが、要は、上級生への絶対服従をしいたのだった。そして、それに反抗するものは、学校の秩序を乱すというかどで、鉄拳制裁をうけた」と書き、その制裁の具体的状況を『栄城』創立80周年記念号（1957年）所収の副島民雄の回想文から採っている（52頁）⁵⁾。

如上より、明治31年に行われた佐賀中学校の春季修学旅行の目的として、5年生が下級生のリーダーたるべき資質を醸成することが読みとれる。

なお、『栄城』所収の本資料に続き、「明治三十一年五月修学旅行別動隊記事」が筆記係によって、より詳細に書かれ収録されている。但し、前書きにあたるところに「本隊の行きたる処は、本隊日記の中に加へて、此処には省きつ」とある。その構成は「第一、国分寺、並びに閑叟公の御墳墓」、「第二、城山及び三瀬村」、「第三、櫛田神社及び聖福寺」、「第四、名島及び香椎神社」、「第五、水城」、「第六、都府楼之跡及び観音寺」、「第七、天拝山及び武蔵寺」からなり、校長の「演告」はない。

4、おわりに

コロナ禍の最中、修学旅行の意義を再確認する意義もあるとの立場から、その淵源を探訪する作業に取り掛かった。筆者には、下村湖人研究というテーマがあり、その作品を分析する視点として「旅」について再検討するという課題を有していた。

しかも、その湖人が佐賀中学校在校中に行われた修学旅行についての記事が、校友会誌『栄城』に2編あり、それを手掛かりに分析を始めた次第である。そのうち、春季修学旅行については5年生にリーダーとしての資質を求める意図があることがわかり、これは『次郎物語』第2部における、次郎が不良の最上級生に小刀をもって立ち向かうというモチーフに繋がる。

秋季修学旅行については、次稿において取り上げる予定であるが、ここでは日田地方にまで足を延ばす記録となっており、当初予定していた『次郎物語』における筑後川上流探検、すなわち

「無計画の計画」を解明する一端となることを期待している。

(のぐち しゅういち・高崎経済大学非常勤講師)

註

- 1) 三瀬村をどのように読むか。『日本歴史地名大系』第42巻〈佐賀県の地名〉(平凡社, 1980年)「みつせむら」と読むが、『角川日本地名大辞典』第41巻〈佐賀県〉(角川書店, 1982年)は「みつせむら」と読む。佐賀県人の島英彰氏にご教示を仰いだところ、「三瀬村はみつせです。佐賀県人も村以外の人はみつせと発音していますが、正式にはみつせです」「何故ならば、初瀬川・鳴瀬川・高瀬川が流れているからです」というご教示を得た。
なお、前掲角川版は「地名は初瀬川・鳴瀬側・高瀬川の3つの『瀬川』が地内を流れていることにちなむという」(667頁)と記すが、平凡社版にはそのような言及はない。筆者は島氏のご教示に従う。
- 2) 福田須美子氏は「教育制度が徐々に整備され学校教育が普及するに従い、青年たちはその将来設計を学校教育と結びつけて考えるようになりました」として、「中流以上の生活を営むために中等教育以上の学歴をという考え方ができると、狭き門をめぐる進学競争が繰り返られるようになりました」と述べられる(『青年期と教育』『やさしい教育原理』〈第3版〉所収, 有斐閣, 2016年, 212頁)。
寺崎昌男他著『教科書でみる近現代日本の教育』(東京書籍, 1979年)には、「当時、中学校はいちじるしい発展を示していた。大正九年(一九二〇)には生徒数が約一八万であったが、昭和五年(一九三〇)には約三万五千となった。さらに、これを明治二三年(一八九〇)の約一万二千と比較すれば、約三〇倍の増加である。すなわち、中学校は明治のころとはちがひ、もはや一部の上層階級の独占物ではなく、すでにいちじるしく大衆化していたのである」という記述がある(127頁)。但し、『青年学校史』(三一書房, 1992年)を著わされた鷹野良宏氏は、「青年学校に学ぶ者が、旧制の全日制中等学校、すなわち普通科としては、男子の中学校・女子の高等女学校、実業科としては農学校・工業学校・商業学校・実科高等女学校等、いわゆる当時の上級学校進学者という学歴エリートを除ききった非エリートであった」(2頁)、そしてこの「少数の学歴エリート」について「同世代中の比率は、進学率が伸びた昭和十年前後ですらわずか二五パーセント」(3頁)という記述をなしている。なお、この書籍の存在については植原孝行氏(立正大学非常勤講師)のご教示による。御礼申し上げます。
- 3) 筆者には、モンゴル襲来を東洋史的視点から俯瞰した論考があり、それを基礎にして日本の近代教育史に説き及んだものもある。まずは、「元寇! キミならどうする?—歴史教科書における『元寇』叙述をめぐる—」(『比較文化の地平を拓く』所収, 開文社出版, 2014年)をご参照いただきたい。
- 4) 佐賀県高等学校教育研究会社会科部会編著『佐賀県の歴史散歩』(山川出版社, 1975年)の「中原宿」の項には、吉田松陰の『西遊日記』の一節、「筑前内野宿をたち山家・原田・田代・轟木宿をへて中原宿にとまっている」(20頁)を紹介している。
- 5) 『青春の絆』(県立佐賀高校, 1950年)という記念誌があり、その第3部には例えば「さらば軍人学校佐賀中学」という記録が掲載されていることは書誌情報によって知りえたが、現物には辿り着けなかった。他日を期したい。

付記

コロナ禍の最中、資料収集もままならない状況であった。本稿で使用了『栄城』については、下村湖人家館長・島英彰氏のご好意によりご恵みいただいた。ここに記して謝意を表するものである。